

# 虹の海の童話集

## ドロココッパ

ぶん・え プアマリナ 1999年10月



普通、カッパは川にいる。

だからカッパというのだが、この辺りのカッパたちだけはちょっと様子が違っていた。

たしかに川からそう遠くはないが、ここは海。ハゼやカニやスナモグリなんかがいるひがたという場所だ。

住みやすいところではない。とくに頭のおさらに海の塩がヒリヒリしみて、背中にも時々ヒビが入ったりするけど、でも彼らの住んでいた川よりはまだまだなのだ。

だからがまんしてみんなここに住んでいる。

カッパたちがひがたにすむようになって

たのはみんなが川を汚したから。

それもある。

もう一つは、ヤクニンとかいう人間が海から川へ通じる道を意味なくふさいでしまったから。

これではカニやエビや魚が川に上って来れなくなる。

カッパたちの食べる物がなんにもない。

死んじゃった川ではだれも生きていけないのだ。

ところがもつと困ったことになった。

今度はヤクニンがこのひがたまで埋め立ててしまおうというのだ。

「一体おれたちに何のつらみがあるんだ。」

カッパたちはついにあつた。

「どうしたらみんなでヤクニンをやっつけてしまおう。」

頭に来てこんなことまで言うのもいたが、カッパのじいさまがみんなをなだめた。



「人間とあらそってもなんにもなりやせん。みんなでヤクニンの気が変わる様にお願ねがいしに行こうじゃないか。」

もともとケンカのきらいなカップパたち。ここは一つじいさまの意見いけんを聞きくことにした。

ただ一つ問題もんだいがある。なんとも人間たちにはカップパが見えないのだ。

つかまって見せ物みやげものにされることもないし、市場いちばで売うられて喰くわれてしまうこともないのはいいのだが、せつかくお願ねがいしに行っても相手あいてに見えないのではしかたがない。

そこでみんなで頭あたまをひねり、ひがたのドロを体中ていぢゆうにぬりたくって行くことにした。これならきつとヤクニンにも見えるはずだ。

ひがたでは漁師りょうしたちが喜よろこんでいた。

だれかがドロを掘ほってくれたおかげで大きなアサリがたくさんとれたからだ。ところが街まちでは大さわぎ。

ドロッコの行列ぎんぎょがぞろぞろと歩いていく。

「ママ、アレハナニ。」

小さな子供こどもがおかあさんに聞きいたが、おかあさんだつてわかるわけがない。

「パパニキイテミヨウネ。」

きつとパパもわかるまい。

でもカップパたちはそれぞれごろじやない。大急いそぎでヤクニンの家うちへと向むかっていく。

それなのになんというこたか。

ようやくたどりついたヤクニンの家うちには大きな犬いぬがいる。これではみんな恐こわくて近づかげやしない。

「おい、お前行ってヤクニンを呼んでこいよ。」

「やだよ。犬がこわい。」

「しょうがない。みんなの願いをドロで書いておこつ。」

必死になってお願いを書くと、カップたちはいちもくさんに逃げ帰った。みんな犬がこわくてしょうがないのだ。

夜になって、家に帰ってきたヤクニンはカンカンにおこりだした。

「いったいだれだ。おれ様の家にきたないドロをぬったヤツは。」

もちろんカップの書いた字が読めるわけもない。

「ええい、くさいドロだ。ひがたのドロにちがいない。あんなところ、さっさと埋めてやる。」

プリプリおこりながら家に入ると、ばんごはんのおかずは魚だった。

「なんだこの魚は。ひがたでとれる魚だな。こんなドロくさいもんが喰えるか。」

もうカンカンになって顔も頭もマツッカカになった。

カップの努力も水のアワ。

これでは明日にもひがたは埋められてしまつ。

マツッカカのヤクニンはまだブツブツ言いながらおみそ汁におはしをつけた。

「おつ、なんだ。こんなに大きなアサリが入ってるじゃないか。」

ヤクニンは考え込んだ。

そして魚も口に入れた。

「うん。うん。うん。うん。」

こんなアサリや魚がとれるんならあのひがたも捨てたもんじゃないと思ひ直した。

「よし。ひがたを埋めるのはやめるとしよう。」

ついにカップの願いが通じたのか、ひがたの埋め立ては中止になった。

## お話の背景

父兄の方に知っておいてほしいこと

カップはもちろん空想上の生き物です。でも多くの川の生きものたち、魚やエビやカニなどの多くの種類では、産卵の際に海に下りたり、河口まで下りなければなりませんし、子供の頃は海ですごし、大人になると川に上がる生き物もたくさんいます。

つまり、海と川との入り口をふさいでしまったら、その川はもう二度と生物の住めない偽物の川になってしまつのです。

そのためにいろんな魚の稚魚を放流したりしてごまかしている自治体もあるようですが……。

またみなさんが潮干狩りなどをする干潟という場所は、多くの生物が住む貴重な場所というだけにとどまらず、実は海の浄化にとっても役立つ場所でもあるわけです。

私たちが汚してしまった川の水も干潟があるからこそ浄化されて海に流れ込みます。海の水も潮の干満のさいに、干潟に住む生きもの達の働きによってきれいな海水に復活できるのです。

おそらく今のまま治水や開発という名の悪魔の事業が進めば、この美しい日本という国の海や川には何も住めなくなってしまうことでしょう。

今の子供たちが大人になるころ、きつと近くの海や川では樹脂でできた魚やエビやカニたちの人形が踊りくるっていることでしょう……。

## 虹の海の童話集

ドロンコカップ

ご意見は、Web版「虹の海の童話集」  
<http://www.mars.dti.ne.jp/gec/fairy>  
またはE-Mail  
[gec@mars.dti.ne.jp](mailto:gec@mars.dti.ne.jp)  
まで